

二十点

⑧しばらくは手にあふれさず岩清水

稲葉 幸

旧天城トンネル口横より向井峠へ行きました。その時の様子そのままです(七月末)。
チヨロチヨロポタポタと流れ落ちる水、冷たく柔らかな感触は何とも言えませんでした。
この水をペットボトルに汲み、立ち寄った所があります。余談なのですが、昭和三十二年に天城山で満州皇帝の姪、愛親覚羅慧生さんが心中しました。数年後、山仲間がこの地に苗木を植えました。姫沙羅の林の中で、その木はありませんでしたが、花立に野草が供えられていました。私たち同様覚えている人が居り、慧生さんにとつて何よりの供養と思えました。

十四点

④かき氷ふんはり空気重ねけり

増田 守

かき氷の美味しさは、削氷だけにあるのではなく、何層にも積み重ねられた空気にもあるのではないか。

十二点

③こしひかり茶漬が爺の暑気払ひ

野上 貞勝

長い夏が九十余歳にはこたえる。日常生活の一節。朝、昼、夜の三食は体力保持の為め、喉越しのよい茶漬にて流し込むようにする。平凡の句と思ふ。

十二点

したたるや岩一枚の窪むまで

小川名みさ

この句は最初「したたるや大岩すこしへこまして」と吟みましたが、どうしても気に入らず、少しほおっておき、また、思い出して、月日をかけ、直し直しして出来ました。この様に気になる句は日数をかけてしまうことがあります、まだまだ作句はむづかしく、恥入っております。

九点

①大鯰明治の顔をしてをりぬ

野上 貞勝

地震は鯨が起こすといふ俗説があり、東北の大地震を思ふと関東大震災と重なり、少年時代、震災記念堂(?)を見学した際に、展示に大暴れの戯画を見た。今にして思ふと四本ひげはどこか明治の人とも思ふ。回想句。

九点

軋しみつつ止まりし電車原爆忌

増田 守

核武装国家の増大と人類の英知によるその抑止への希求。

八点

①しまい湯の溜息ひとつ遠花火

荒木ツル子

その日は、娘達家族が久しぶりに来ており、夜帰って行きました。やっと、片づけが終わり、疲れと満足感で最後のお風呂に浸かりました。半分居眠りをしながら、今日あったことを思い返していますと、遠く花火の音がかすかに聞こえ、虫の声も一瞬止み、花火の音だけがお風呂場に残り、静かな幸せを感じた夜でした。

八点

①水平線雲の離れし晩夏かな

佐渡谷秀一

近頃の夏はやたらと猛暑が多く、もくもくとした入道雲を見ていると、若い時とちがってうんざりします。或る日、地平から(水平線としましたが)遊離して浮かんでいる雲を発見したとき、実態は兎角、秋が近づいているんだなアと思いました。その後、今までに詠んだことのない、「処暑」「白露」の句などを作っていますが、そうありたいという気持です。

八点

車道脇空蟬ひとつ夏終る

安中 忠夫

時折、涼風を肌感じられるようになって来た頃、車道脇に空蟬が転がっていたので、蟬の一生のはかなさを思い、傍らの植え込みに、そっと戻してやりました。暑い夏ももう終わりだなアと思いました。